

大阪府立成人病センター整備事業

参考資料 4 - 1

大坂城跡発掘調査報告書 I (抜粋)

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第78集

大坂城跡発掘調査報告Ⅰ

— 大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

本 文 編

2002

財団法人 大阪府文化財センター

II 調査の経過と成果の概要

1、調査の方法と経過

調査は大阪府庁の業務を妨げない条件の下、建築計画にあわせて進められ、平成2年度からの6年間で14カ所の調査区が設けられた。なお調査区の名称は、(調査回次：平成2年度を第1回目の回次とした) + (同じ年度内でのトレンチ記号：A・B・C・・・) + (同じ調査区内で細分したトレンチの番号：1・2・3・・・) で表現される。

1 A調査区は整備地区の南西隅に位置する。面積は約4300㎡である。試掘により、豊臣期の遺構面が地表下約6メートルの深さにあることが判明したため、必要な土留め工法として、調査区を外周部と中央部に分けた二重矢板方式が採用された。調査は外周部の江戸時代面からおこなわれ、その後に土留め作業と併行しながら、外周部の豊臣期面でおこなわれた。中央部の調査は外周部の埋め戻し工程にあわせて西側からおこなわれ、その成果の一部を2月16日の現地説明会で公開した。

1 B調査区は大手通りと上町通りの交差点南西に位置する。面積は約1800㎡である。1 A調査区と同様に豊臣期の遺構面までの深さが5 mを越える状況が考えられ、二重矢板方式の土留めが採用された。

1 C調査区は大手通りの北側で、職員会館(当時)の建つ南側の広場の一部にあたる。江戸時代面のみ調査である。

2 B調査区は大阪府・庁舎周辺整備地区のほぼ中央に位置し、北は大手通りに面する。面積は782㎡である。本調査区は労働部庁舎として前年度まで使用されていた場所であり、地表下約2 mまではその基礎で削平されていた。また調査の過程で、調査区の中央部以南で基盤層の浅くなる状況がわかり、土留め2段梁の設定は北部のみとなった。4～10月の調査である。

2 C調査区は大阪府庁別館の東にあたり、北は大手通りに面する。面積は1718㎡である。なお中央部の450㎡は地下室により削平されていた。調査は北側からすすめられ、近世以降で3面、中世以前で2面の遺構検出面を確認した。なお、中央部から南は基盤層が地表下2 m未満で確認され、一方北端からは谷が確認された。5月～1月の調査である。

2 D調査区は周辺整備地区の東部中央に位置し、平成2年度調査の2 B地区に北接する。面積は1798㎡である。工程の調整により南北を2分し、それぞれについてさらに東西に2分したトレンチが設定された。前年度調査区と同様に、江戸時代面の下には層厚3～4 mにおよぶ江戸時代初期の盛土が確認され、その下から豊臣期の堀などが検出された。11月～3月の調査である。

3 A調査区は整備地区の南西隅に位置し、南を1 A調査区に接する。面積は2781.3㎡である。前年度までの調査成果により、古代を含めた3 A調査区の最終掘削深度は地表面から11.5m下がることが予測されたため、必要な土留め工法としてアースアンカー方式と栈橋を用いた矢板切り梁工法が採用された。なお周辺整備事業全体の工程調整により3 A・3 B調査区は平成5年度6月までを工期とする債務事業となった。調査は建築工事との工程調整により南北の2分割でおこなわれ、南側のトレンチ(6・7)は4～12月、北側のトレンチは12～6月のスケジュールとなった。

3 B調査区は1 A調査区の西に位置する。面積は746.8㎡である。調査区の中央部分にビルが建っていたため江戸期の面は大半が失われていたが、豊臣期から下の遺構は、夏の陣の焼土層を含めてほとん

ど残されていた。12～6月の調査である。

3 C調査区は周辺整備地区の北東で、2 D調査区に東接する。アースアンカー工法で土留めをおこなった。面積は1392.4㎡である。調査区の西半部は基盤層が高く、土留め段数が減少した。4～10月の調査である。

4 A調査区は整備地区の北ほぼ中央部に位置し、西を2 C調査区、東を2 B調査区に接する。面積は3219.1㎡である。調査は掘削土の仮置き場所を確保するために南北に分割した形でおこなわれ、調査地は北側のトレンチから順次移動していくこととなった。このうち1～10トレンチの東西面と11～15トレンチの東面については、2 B・C調査区で打設した鋼矢板をそのまま土留めに再利用した。一方11～15トレンチの西面については、隣接するトレンチの調査結果により基盤層までの深さが1 m程度であることがわかったため、斜面による土留めとなった。また16トレンチについては、隣接する地区の遺構検出面が深い位置にあることが予測できているため、鋼矢板による土留めをおこなった。

5 A調査区は整備地区の南中央に位置し、東は大阪市中央体育館、西は大阪市立東中学校にはさまれている。両者共に大阪市文化財協会による調査がおこなわれ、前者からは江戸時代の武家屋敷・豊臣前期の大名屋敷が発見されている。敷地の中央部は旧営林局舎の地下室および基礎で削平されており、またその周囲も同舎建築に際しておこなわれた掘削工事により削平されている。面積は3219.1㎡である。なお全体の地形は概ね平坦であるが、北東部に谷地形をもち、西部は上町台地の西斜面として緩やかに下降している。面積は2562.1㎡である。

5 B調査区は整備地区のほぼ中央に位置し、東は5 C、南は3 A調査区に接する。面積は2399.5㎡である。試掘により、調査区の北は11層までの深さが2 m程度、南は深さ8 m程の3 A調査区に接していることがわかったため、3 A調査区に近い幅約8 mの部分については切梁工法による土留めを、その北側については一方が自立、一方がアースアンカーによる土留め工法をとった。

6 A調査区は5 B調査区の北に位置し、東は4 A調査区、北は2 C調査区に接する。掘削土の仮置き場と調査前の調整により、北から分割してトレンチを設定した。地形は概ね平坦である。

なお紙数の関係で詳述することができなかったが、5 C調査区的面積は1758.3㎡である。

2、正報告書作成の方針とその仕様について

平成2年から6年間にわたり調査されてきた延べ調査面積は11万8261㎡、遺構数は1万以上、撮影枚数は6×7サイズで約2万枚、出土遺物の登録番号は19381であり、それより推定される遺物の総破片数は50万点を越える。これらの成果の一部についてはさきにあげた調査概要1～6と図録1～5で既に年度毎に公開してきたが、当然ながら遺構の総合化と、とくに木製品と三の丸築造以前の一括資料の整理が不足していた。

そこで本書では、限られた作業延べ時間の中、これらの膨大なデータに対し、現状の研究課題に対し、十分ではないが不足することのない事実報告の完了をめざし、1 A～6 Aの全ての調査区を大きく以下の5時期に分けて編集し、各時期の特徴を示す遺構を軸に、その説明をおこなうこととした。

第1期・・・徳川氏による大坂城再築後（基本的に後述の第4層上面）

第2期・・・大坂夏の陣集結後、徳川大坂城再築直前（第5層除去後に現れる畑などの耕作面）

第3期・・・三の丸築造以降、大坂夏の陣直前（いわゆる豊臣後期または三の丸期）

第4期・・・豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（いわゆる豊臣前期または惣構期など）

第5期・・・豊臣大坂城築造以前（古代を含む）

これまでの概要報告で述べてきたように、これらの時期区分は当該調査区を通じて確認できる膨大な盛土層を基準としている。ところが最も南に位置する5A調査区ではそれらの盛土層がみられず、厳密な層位関係において、それ以外の調査区と共通して扱うことができない状況にある。そこで本書では、5A調査区については調査区内での遺構の先後関係はあるものの、それをそのほかの調査区と連動させることは止め、便宜的には第3期に該当する節に属させてはいるが、それらと切り離して第2期～第4期を区分することなく説明することにした。さらにこれは5A調査区の遺物についても同様であるため、5A調査区の遺物は、本来三の丸築造以前の時期に属するものであったとしても、一部を除き便宜的に、

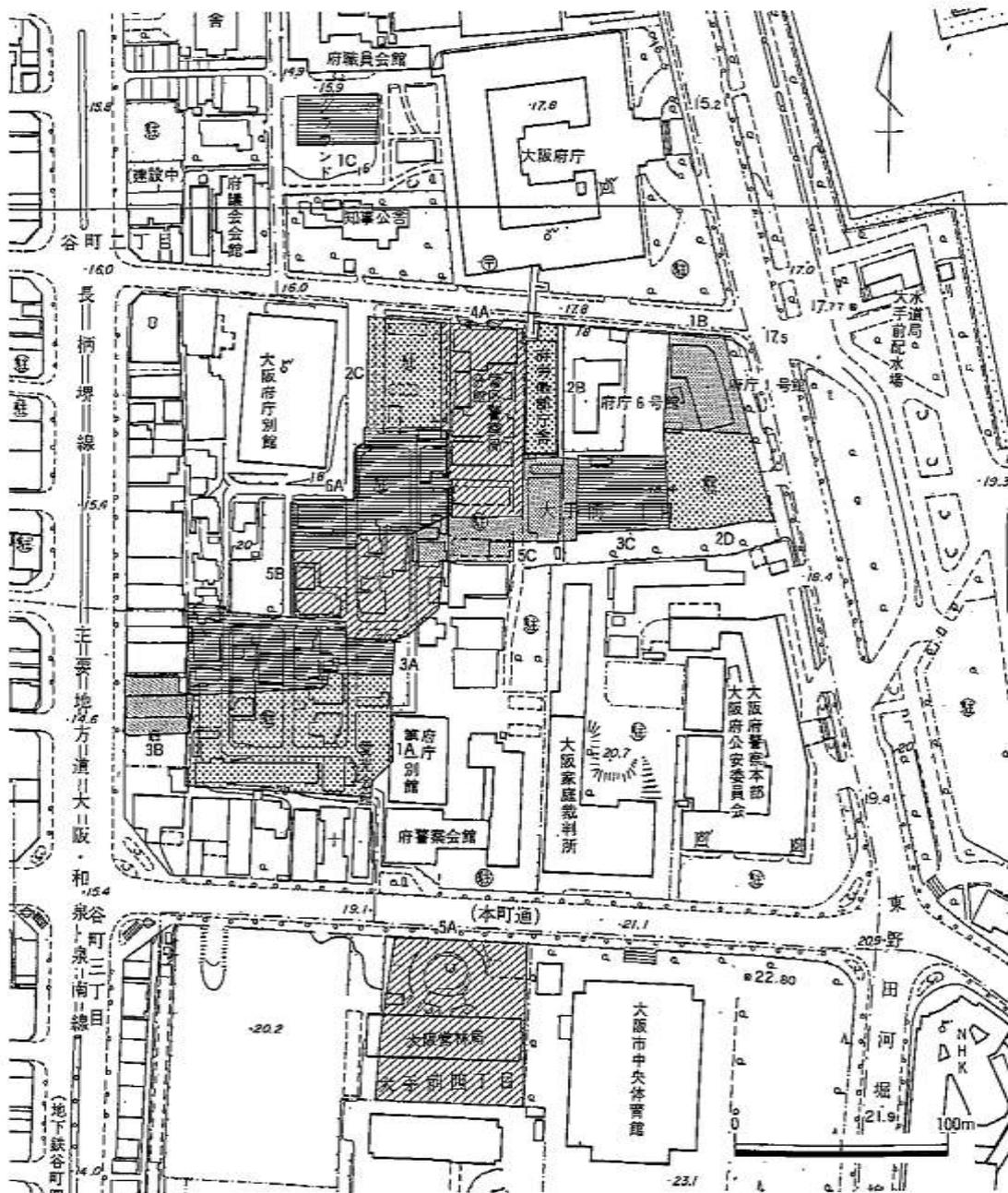


図6 調査区の位置

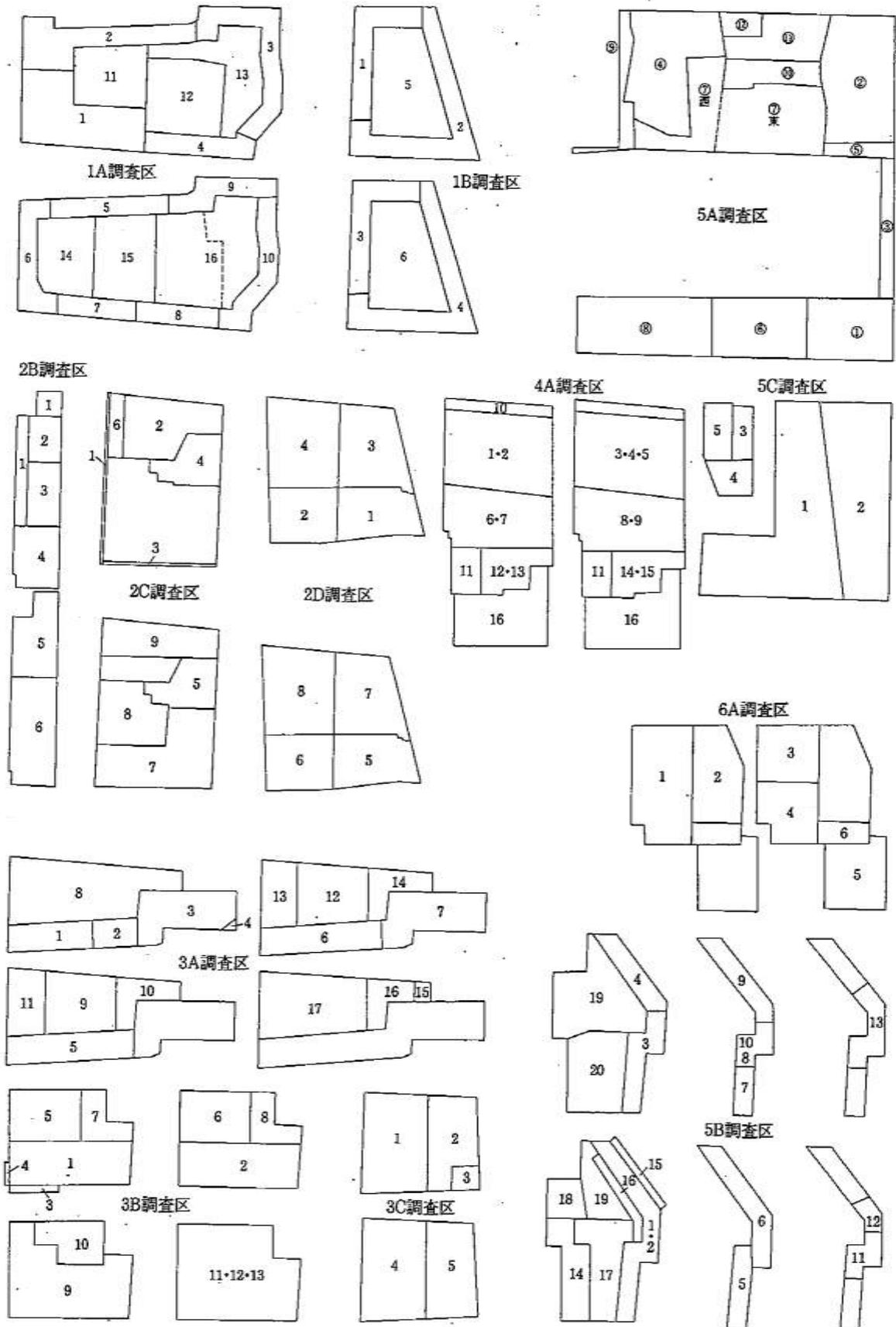


図7 トレンチ配置図

三の丸築造以後の説明の中で触れられることになっている。ご了承ください。

遺構の説明については、これらの条件を前提として、各時期の最初に全ての調査区を統合した遺構配置図をインデックスとして設け、この図に概要報告に掲載している遺構とその後の整理で報告されることになった遺物を出土した遺構を優先し、それらに通し番号を付与している。個々の遺構の名称・国土地座標・深さについてはこの図に続く表を参照されたい。また遺構の説明は、おおむね井戸・溝・土坑・ピット・その他の順としているが、多少の前後はある。

さらに紙数の関係で概要報告に提示しながら非掲載となった遺構と、部分的な遺構配置の詳細図もある。その大部分は現時点での当該遺跡研究に支障となるものではないと考えるが、その一部が将来屋敷地の内部構造の解明に障害となる可能性も否定はできない。その意味で本書は、厳密にはこれまでの概要報告の全てを網羅し、それを更新したものとは言えず、研究者各自の問題意識において、必要に応じた概要報告との併用はおこなっていただきたい。

加えて概要報告にも本書にも掲載しきれないデータは、各種の図面として膨大に蓄積されている。本書の刊行によって遡及される問題に対して、これらのデータの活用方法が今後の課題として残されている。そしてもちろんこの問題が遺構図面だけに留まるものでないことは言うまでもない。

遺物については、これまでの概要報告の中で、とくに木製品と三の丸築造以前の一括資料が不足していたため、公開してきたデータの編集に加え、平成9年度の前半で漆器および木製品の実測(534点)を、後半では三の丸築造以前の一括資料(293点)の実測を集中的におこない、これを補った。

なおこれらの遺物の内、土器・陶磁器・漆器類の掲載は、共伴関係と、とくに出土状況を重視する観点から、原則的に井戸・溝・土坑・建物関連などの順としている。

またそれと同じ視点により、大坂夏の陣の焼土の整地層と考える6 a層と、その上に堆積している徳川大坂城築造に際しての盛土(5層)の狭間で検出された遺物(5・6層)については、調査者による無意識の選別を避け、遺物に帰属する時期の厳密性を高めるために、全て5層の形成された1629年までに現位置を離れたものとして、豊臣期ではなく、それ以降の時期の出土状況あつかいとした。第1期として掲載している遺物に、豊臣期の遺物が多く含まれているのは、その理由による。

なお遺構の部分で述べたような公開できるデータ量の物理的な限界をできるだけ軽減するために、本書では原則的に遺物個々の煩雑な説明は避け、データリストとしての観察表を多く作成した。これにより図化できなかった遺物についても、写真または法量および分類の特徴などにより、最低限の情報は公開できたものとする。これらが第3章-2-(6)の各表にあたる。

文章については、第1章の位置と環境が小林和美、第2章Iの調査に至る経緯が赤木克視、第3章-2-(4)-B-aの内、基盤層直上で検出され、明らかに豊臣期でも古い段階あるいはそれ以前に遡る可能性も考えられる5 A土器群については福岡正春が、各時期の金属製品と羽口については新海正博が執筆し、下駄と焼塩壺の分類については佐藤友美が鋤柄を補助した。

そしてそれ以外の全ての文章の編集は鋤柄がおこなった。ただし概要報告での内容に異同の無い場合は、遺構・遺物共にできるだけそのデータを再録することに努めたため、本来の執筆分担についてはそれぞれの時点の概要報告に遡るのが望ましいだろう。

これにより、6年間におよぶ発掘調査すべてのデータを網羅できたわけではないが、本書は現時点で求められる当該時期の研究に対し、この時期最大量の情報を提供できたものとする。

第3章 調査成果

I 考古学的調査

1、層序

(1) 基本層序

大坂城跡の層序の特徴は盛土の繰り返しによる造成の歴史に表現される。そこで層序の整理においては、複数確認される遺構面および生活面を、その時代の基盤層とされた盛り土（b層）と、生活面上に堆積した層（a層）（ここでは、流水などで形成された二次的な包含層ではない当時の生活の過程で形成された、という意味で「生活包含層」という用語を用いた。）の二層一組で考えることにしている。

ただし、8層については造成の規模が小さく、上記2層の峻別が実際には不可能な場合が多いため、9層については当初規定した時代区分に対して、他地区の調査でそれを細分する層が確認されたため、これらの記号をそれぞれの層の細分についても用いている。

以下に述べる基本層序は、上記の条件をふまえた上で、平成2年度におこなわれた1A調査区の堆積状況をモデルに、時期的な属性を加えて編集したものである。

- 1層 現代の盛土。層厚は約0.5～1mである。
- 2層 明治後半から昭和初期の包含層と考える。層厚は約0.5mである。
- 3層 江戸時代後期から幕末期の包含層。層厚は約0.5mである。
- 4・5層 前述の整地層および盛土である。4層上面が江戸時代後期の遺構検出面である。このうち4層は生活基盤層として土質も安定しており、比較的遺物の包含も認められる。5層は無遺物状態に近く土質も軟弱な状況を目安とした。1・3A調査区などでは層厚は3～5mであるが、5A調査区では西端の谷肩部でのみ明確に確認され、5C調査区では東部の傾斜面などで部分的に確認されたのみである。なお1A調査区の西端は、この盛土による段差がそのまま残され、現在もその一部は石垣として見る事ができる。
- 6層 基本的に焼土（a層）と盛土（b層）を一組にした構成からなるが、全ての調査区で明瞭なa層が検出されるわけではない。ただし、5A調査区では3層を除去した段階で複数の焼土混じりの整地層および盛土層が確認され、これを当該層および7層に相当させた部分もある。いずれも層厚はおおむね0.1～0.2mである。
- 7層 基本的に生活包含層または焼土（a層）と盛土（b層）を一組にした構成からなる。いわゆる三の丸築造による盛土で層厚は

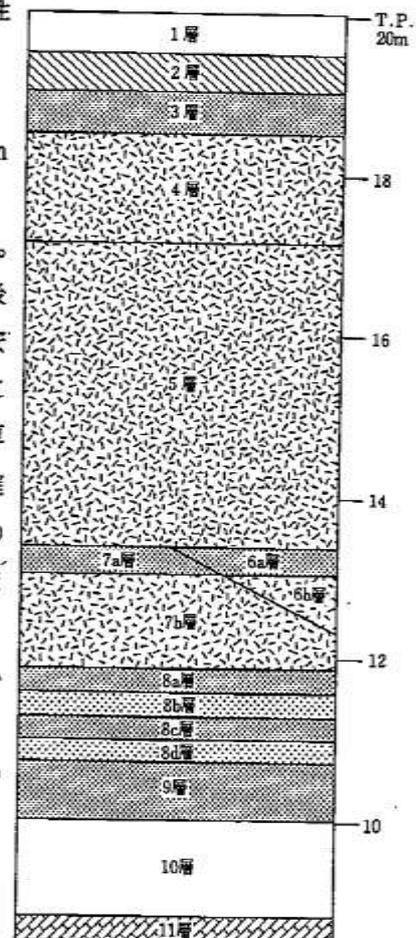


図8 基本層序模式図

1 m程である。5 A調査区では焼土混じりの盛土が相当すると考えられる。

8層 豊臣前期を構成する層として、3 A調査区ではa（新）または黄褐色砂層・a・b・c層（2 B調査区はd層まで）に分層した。ただし傾斜地形により、各層の全てが全体に認められるわけではなく、逆に谷底部にあたる3 B調査区では部分的により細分されるところもあった。層厚は0.1~0.3mである。

5 A調査区で複数の焼土混じりの整地層および盛土層として確認している。

9層 1・3 A調査区では谷の包含層として確認された。2 B調査区の堆積にならい、おおむねa（中世）、b（平安）c（7・8世紀）層の細分をおこなっている。5 A調査区では1・6・8トレンチを中心とした基盤層上面でa・c層が確認されている。

10層 6世紀後半を中心とした包含層としている。

11層 基盤層。

(2) 調査区毎の層序概要

A、1 A調査区

調査区西端に石積みが見られるが、その掘り方には明治期の遺物が含まれており、その時期を知る手がかりになる。3層は18世紀後半から幕末の遺物を含む層であり、調査区西端には石垣などの施設をもたない。調査区全面に分布する。4層は江戸期の整地層である。場所により差はみられるが、層厚は1 m前後を測る。5層は層厚4.5mの盛土である。

6層は焼土の整地層および生活包含層とその基盤層である。焼土の整地層は調査区の西北を中心に検出された。7層は調査区の北西部と10トレンチで、谷の埋土を基盤層として確認された。8層は10トレンチでその上面を検出し、礎石群とあわせて屋敷1とした。なお10・と6トレンチの谷斜面および、14・

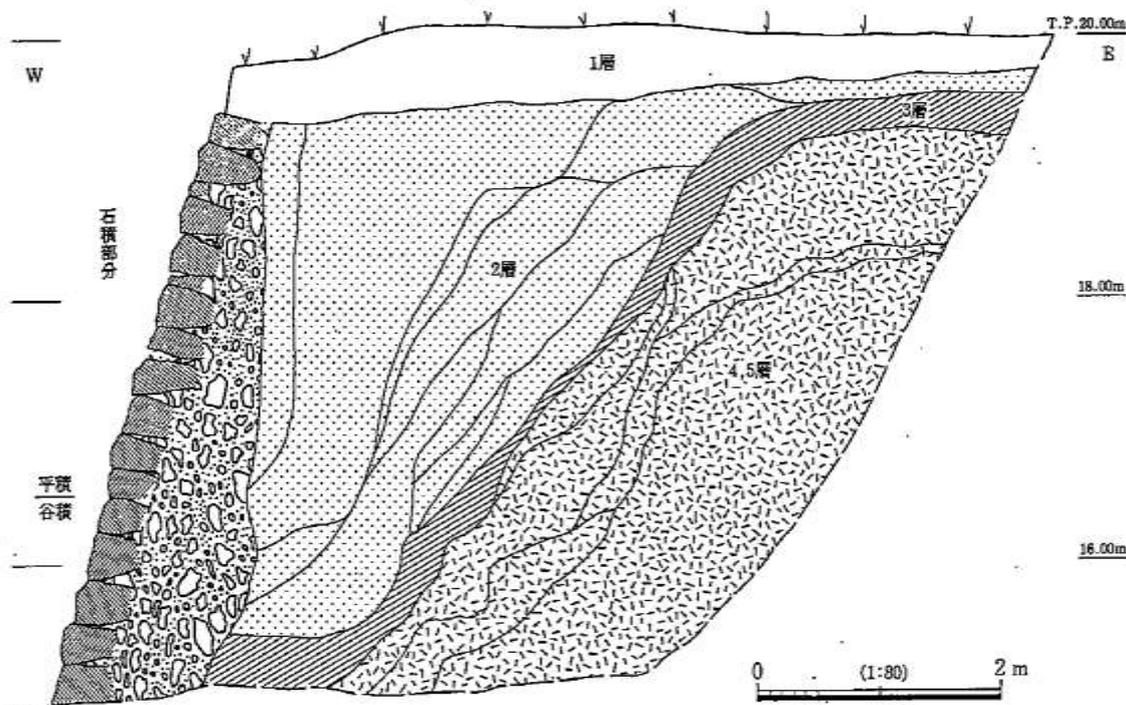


図9 1 A調査区東西縦断面図

15トレンチの谷に近い基盤層上面の窪み部分から9・10層も検出されている。

B、2D調査区

1・2層は明治期以降の層と考えられ、層厚は0.5～1m前後を測る。両層ともに軟弱な砂混じり粘土およびシルトであり、礫・材・瓦などを不均一に含んでいる。盛土または整地によるもので、遺構は検出されなかった。3層は江戸時代後期～明治初期と考えられる。層厚は0.5m前後である。やはり礫・材・瓦などを不均一に含む粘土およびシルト層である。砂混じりシルトを基調とした比較的安定した層（4層）を基盤層として、土坑・溝などが検出されている。4層は層厚が約1mほど、さらにその下にシルト、粘土のブロックがランダムに含まれる5層（層厚2～3m）が認められる。

5層除去後の状況は、調査区の東西で大きく二分される。

西半部は北側で砂層と11層のブロックを含む6b層、南側で比較的安定した11層のブロックを含む6b層がみられ、いずれもこれらが堀の埋土となっている。堀は11層を基盤とし、下層に黒色粘土と砂層からなる7層および暗灰色シルトの8層をもつ。堀埋土である6b層からの遺物の出土は僅少であり、遺物は主に7層上面および7層内から出土し、わずかに8層中からも確認されている。

東半部は北側で均一な砂層（層厚1m前後）が見られる部分、南側で複次堆積の砂層がみられる部分もあったが、大半は不整形な起伏を呈して直接11層に達している。

C、3A調査区

1～5層はこれまでの調査区と同様である。

6層は調査区の南西隅のみで確認された。溝17の埋土の一部であり、上面に焼土（a層）が堆積し、b層上面では礎石の抜き取り痕跡がみられた。7層は全面で確認された。a層は北部で焼土を整地した層が広がり、南部は黒色シルトの生活包含層となっている。概ね平坦な地形である。なおb層の厚さは約2mである。

8層はa～cの3層に分けられる。ただし北から南へ下がる傾斜地形を呈するため、調査区の北側ではa層のみの確認となり、調査はa層上面およびa層掘削後の11層上面の2面となっている。また調査区の南半部ではa層の上に黄褐色砂層と黒色粘土が堆積しており、遺構は黄褐色砂層の上面からも確認されている。なお中世期に比定できる9層上面の段階で調査区の中央部に東西方向にはしる段があり、その南側の低地を埋め立てることにより平坦面を拡張していった状況が、c層～黄褐色砂層の堆積の状況により観察される。

9層は大きく平安時代以降と奈良時代の層に分けられる。前者の遺構は確認されなかったが、後者は土器溜りとして生活面を調査することができた。

10層は特に調査区の東端で南東へ下降する斜面肩部で確認された。6世紀後半を中心として、鍛冶炉・土器溜りなどが検出されている。

D、3B調査区

1・2層は近代以降の盛土であり、地表面から約0.8mで3層に達する。江戸時代後期～幕末の遺物を含む3層は当該調査区で焼土層として検出された部分が多い。今後火災記録との対照が必要とされる。なお3層の層厚は約0.2mである。

基本層序で4・5層としたもののうち、本調査区では一括盛土である5層が大半を占め、江戸期の整地層である4層はほとんど確認されなかった。層厚は約1.5mである。

6層は火災整地層である6a層と盛土の6b層から構成される。6a層は調査区北東部に当たる池状

遺構（池1）の堆積部分以外はすべて確認された。6 b層は黄褐色のシルトを基調とし層厚0.5m程で池状遺構以外に堆積している。なお南端の部分は6 a層を除去した時点で奈良時代の包含層（10層）および11層がみえる。

7層は池1を形成する石垣の基盤層となっているもので、7 a層が褐色シルト、7 b層の大半は明褐色の細砂層、一部は粘土・シルトのブロックから構成される盛土となっている。ただし、7 a層は層厚が0.1m未満と薄く、確認された範囲も全面ではなかった。今回は調査区東部で検出された瓦組導水管、点在する礎石と柱痕跡によりその存在を知ることができた。なお7 b層の層厚は1.5mである。

8層はa～d層に細分され、一部はさらに細かな堆積を示す部分もあった。8 a層は、調査区北よりでは7 b層掘削後に現れる黒色粘土の下に、南よりでは7 b層除去直下にあらわれる。黒褐色シルトを基調とし、層厚は0.1～0.2m程である。8 b層以下は、各面の基盤層である盛土（いずれも層厚は0.1m足らず）を除去することによって確認し、設定していった。

9・10層は青灰色シルトを基調として谷部の流路を含む。層厚は谷の中心に近い部分が最大で約1.4mを測る。

E、4 A 調査区

1～4・5層の状況は全トレンチにおいて共通する。1・2層は明治期以降の層と考えられ、層厚は0.5～0.8m前後を測る。両層ともに基本的に軟弱な砂混じりシルトであり、礫・材・瓦などを不均一に含む。2層の一部にはコークス殻が厚さ5cm程度敷き詰められている。盛土または整地によるもので、2層上面で昭和初期の土坑が数基検出された。3層は幕末～明治初期と考えられる。層厚は0.1～0.2mを測る。堅く締まった青灰色の砂混じりシルト層である。砂混じりシルトを基調とした比較的安定した層（4層）を基盤として溝・土坑が多数検出された。4層は層厚が0.2～0.3mである。5層は明確に4層と分けることができなかったが、4層の下に粘土・シルトのブロックが含まれる層があり、これを5層とした。

6層は調査区の南側の一部でのみ確認できた。炭を多量に含む青灰色粘土および砂混じりシルトである。6層特有の焼土層は見られない。この層は地山上の自然の窪みを埋めるかたちで堆積したものと考えられる。層厚は0.1～0.3m程度である。

9層は調査区の北側の一部で確認できた。検出された範囲も2×5m程度であり明瞭な広がり確認できなかった。層厚は0.2mを測る。

基盤層（11層）は西から東、北から南へと緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦である。

F、5 A 調査区

北側調査区と南側調査区では堆積状況が大きく異なる。北側は後世の削平が著しく、全体的に基盤層までの堆積は薄い。一方、南側（特に南西側）では非常に厚い堆積が認められ、結果として多くの遺構面が確認されることとなった。

1～2層は全トレンチで見られる。近現代の整地層である。3層は江戸後期～幕末頃の焼土層で、北側の一部と南側の東部にのみ確認できる。4～5層は江戸時代の整地層である。ほぼ全トレンチで確認できるが、明瞭ではない。6～8層は豊臣期の整地及び包含層である。これらは南調査区を中心に検出され、北側では部分的に残る程度である。9層は中世～古代の包含層で南調査区を中心に検出された。北側にも僅かに分布する。なお基盤層は東から西・北から南に向け緩やかに傾斜する。

G、5B・6A調査区

谷部と丘陵部が確認され、6A調査区の全面と5B調査区の北半を占める丘陵部分では、後世の削平が著しく、全体に基盤層までの堆積は薄い。一方、5B調査区の南半にあたる谷部分では、3A～1A調査区につながる厚い堆積が認められた

1～2層は全域でみられた。近現代の整地層である。3層は江戸後期～幕末頃の焼土・炭を含む整地層である。丘陵部の中央から南側で確認できる。4～5層は江戸時代の整地層である。全域で確認でき、特に谷部では非常に厚い堆積をみせる。6～8層は豊臣期の整地及び包含層である。これらは丘陵部南側から谷部を中心に確認された。なお、丘陵部北側では4～8層の遺存状況は良好でない。9～10層は中世～古代の包含層ではほぼ全トレンチで検出された。特に谷部での堆積は厚く遺物の包含量も多い。基盤層は丘陵部で東から西・北から南に向け緩やかに傾斜し、南側に広がる谷部の肩より急激に落ち込む。

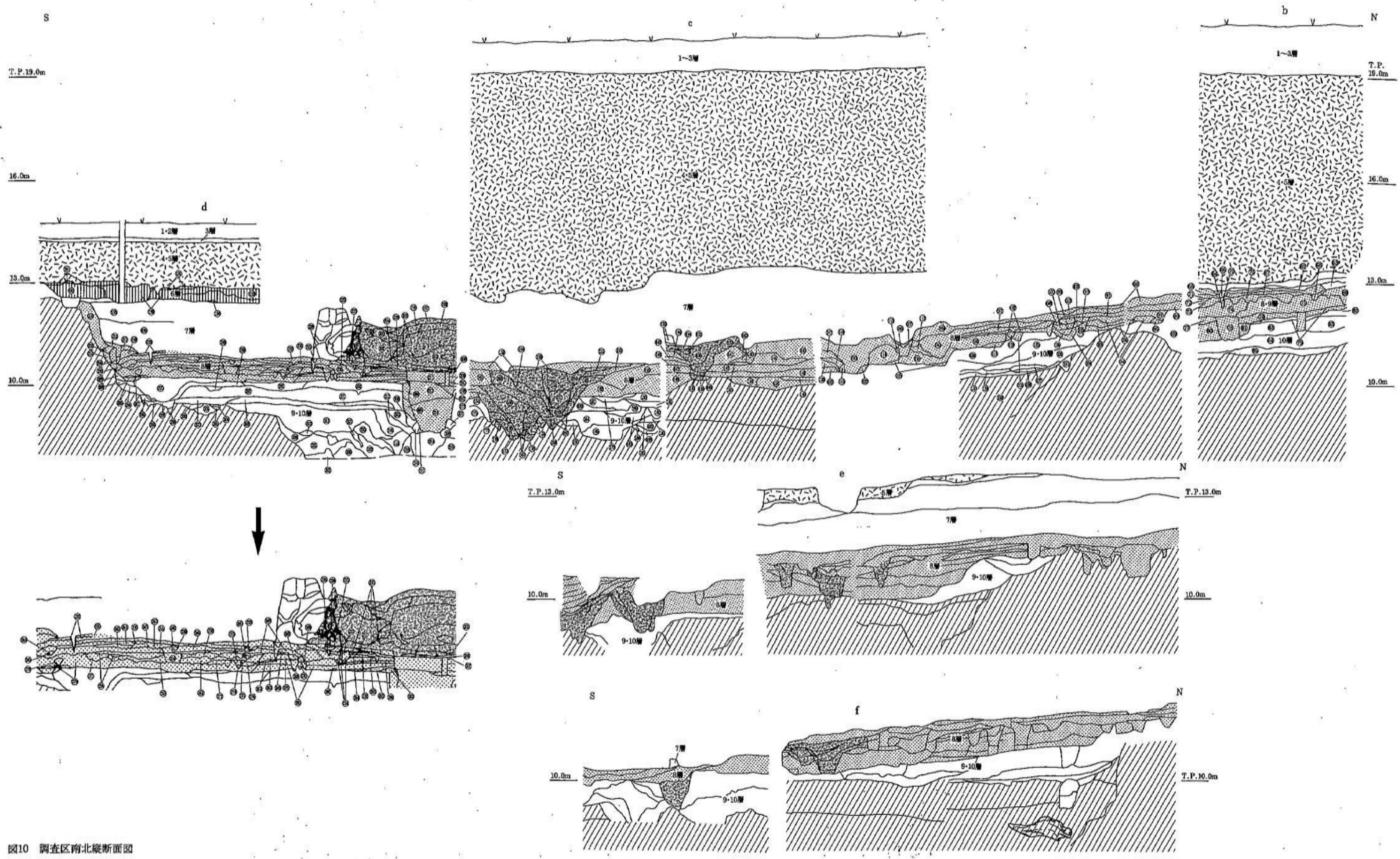
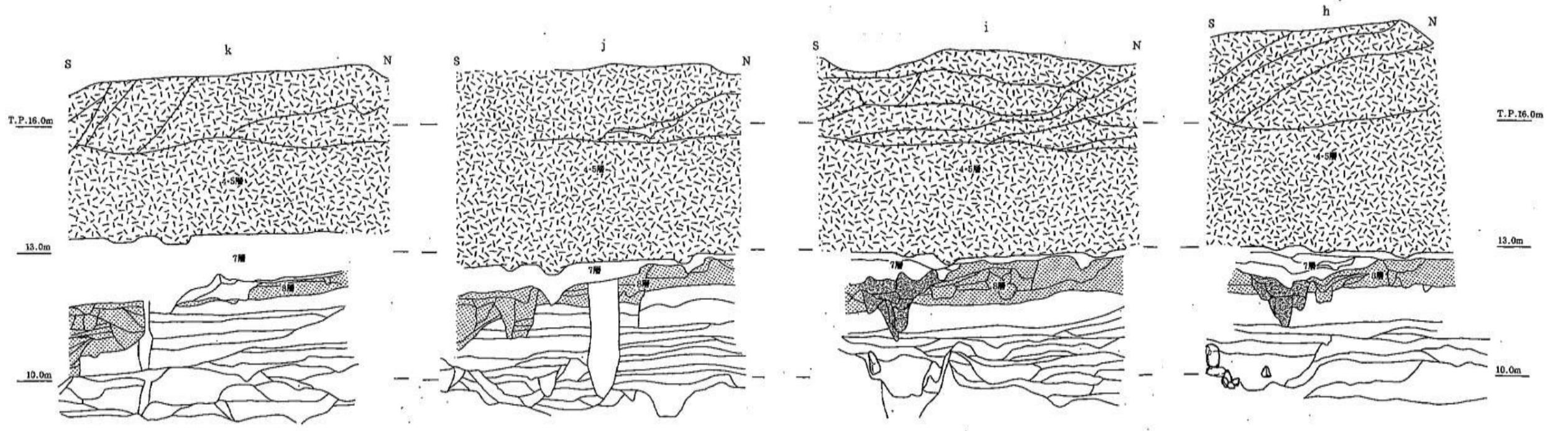
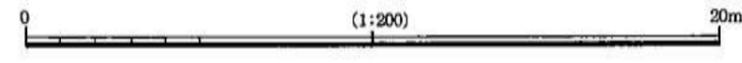
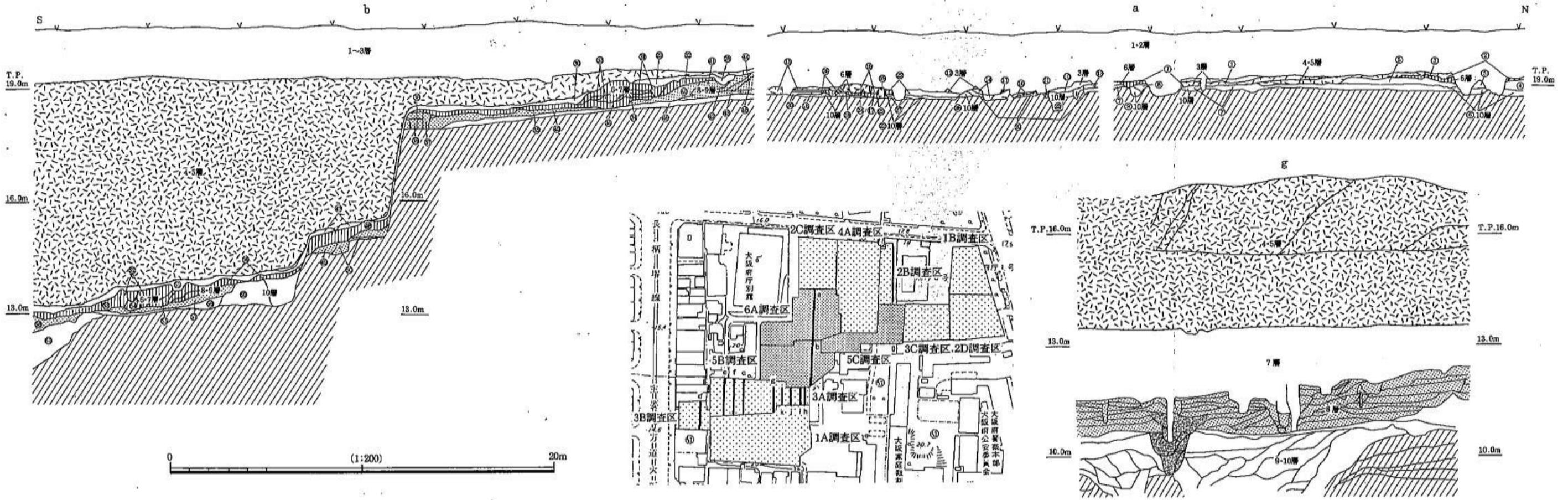


图10 调查区南北纵断面图



大坂城跡発掘調査報告Ⅰ

大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

発行年月日 2002年6月28日

編集発行 財大阪府文化財センター
堺市竹城台3丁21-4
大阪府教育委員会文化財調査事務所3階

印刷 榊中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6-8